日本文学史

浅田善二郎監修
日本文学研究会編集

教学社

浅田善二郎監修
日本文学研究会編集

日本文學史

教学社

定価 100円

1955年4月1日 印刷
1955年4月5日 発行

監修者 浅田善二郎
編　者 日本文学研究会
代表 長谷川　孝

発行者 高島国男

印刷所 共同印刷株式会社
京都市上京区下長者町通土屋町東入

京都市左京区岡崎法勝寺町 117
発行所 図書出版 教学社
振替京都 15695・電話吉田⑦739
東京支社 東京都千代田区神田神保町3の19

はしがき

フランスがヒットラーのファシズムの軍隊にふみにじられた時、仏国民の悲しみと怒りを何よりも強く表現し、国民に広くうたわれ、かれらに祖国愛の心を振いたたせたのはルイ・アラゴンの「バラと木犀」などの詩である。そして、それにはフランスの詩の伝統がもっともよく生かされていた。外国の例をひくまでもない。芭蕉の俳句が高い芸術的価値をかちえたのも、西行・俊成以来の中世詩歌の伝統を新しく生かして、元禄当時の庶民の感情をうたったからである。すなわち、すぐれた文学創造は、その文学伝統を新しく生かしたところに生れる。伝統を無視してすぐれた創造はありえない。われわれの文学伝統はどういうものか、これを検討する心がまえでもって、先人たちの最近の新しい研究成果をふまえ、高等学校の生徒諸子のために書かれたのが、この日本文学史である。これを手がかりとして、日本文学の伝統を一そう追求していただきたい。いうまでもなく、文学は言語を媒材とした芸術であり、言語は民族の歴史とともに生み育てられてきた民族の貴い遺産である。本書ではこの貴重な民族遺産の言語が

各時代にどのように変遷してきたかに特に意を用いた。

一九五五・二・二三

浅田善二郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

凡　例

一、それぞれの時代を通じて、はじめに序説で、その大綱を説明し、各時代の特性に応じて詩歌、小説、評論、随筆などの部門に分類して解説した。

一、文中の主な書名と著者名とをゴシックであげた。

一、上欄には、左のように分けてかかげた。

詩歌、小説、評論、随筆などの部門は8ポイントの大きな活字

文中の主な書名と著者名は6号の活字

文中の重要な事項は6ポイントの小さな活字

一、教授し易く、理解し易いように、文学地図を附した。

一、本書は、藤森完治、長谷川孝、藤沢胖、鳴尾栄次、水戸義敏が共同で執筆した。

目次

総説

第一章　上代文学……一

序説……一

古事記……一

日本書紀……四

風土記……七

万葉集……一〇

第二章　中古文学……一九

序説……一九

詩歌……二〇

歌論・歌謡……二五

物語……二六

歴史物語……二四

日記……二六

随筆文学……二八

第三章　中世文学……四一

序説……四一

詩歌……四三

歌謡……五〇

物語の変遷……五三

説話物語……五七

日記・紀行・随筆……六〇

法語・遺文……六四

能・狂言……六五

五山文学……七〇

第四章　近世文学……七三

序説……七三

儒者の文学……七五

国学者の文学……七七

和歌……七九

狂歌……八一

俳諧……八三

川柳……九四

小説……九五

読本……九九

浄瑠璃……一〇四

歌舞伎……一〇八

第五章　近代文学……一一三

序説……一一三

一　**小説・評論**……一一五

前期……一一五

啓蒙期の小説……一一五

翻訳小説……一一六

政治小説……一二七
写実主義と浪漫主義の小説……一二七
観念小説……一二四
社会小説……一二四
中期……一二六
自然主義文学……一二七
反自然主義の文学……一三一
新浪漫主義の文学……一三四
新理想主義の文学……一三六
新現実主義の文学……一三八
後期……一四一
新感覚派の文学……一四一
プロレタリア文学……一四三
新興芸術派の文学……一四四
新心理主義の文学……一四五
戦時下の文学……一四五
戦　後……一四八
二　詩、短歌、俳句……一五三
詩……一五三
新体詩……一五三
浪漫詩……一五四
象徴詩……一五七
自由詩……一五九
ダダイズムの詩……一六四
シュール・リアリズムの詩……一六五
プロレタリア詩……一六五
戦時下の詩……一六七
戦後の詩……一六七
短　歌……一六七
自然主義風の歌……一六二
アララギ派……一七二
各派の分立……一七三
昭和の短歌……一七五
俳　句……一七七
日本派……一七七
新傾向俳句……一七七
新興俳句運動……一七八
三　戯　曲……一八一
歌舞伎……一八一
新派劇……一八一
新　劇……一八二
プロレタリア演劇……一八三

第一章　上代文学

序説

序説　上代とは太古から平安奠都（延暦一三―七九四）迄の時代をいう。正確な年数はもとより分からない。帝都が概ね大和の国に在ったので大和時代ともいう。民族は素朴健康な農耕漁猟の生産活動に従事し、その文学もまた素朴明朗、純真で生々発展の気に富んでいる。外来思想は未だ深い影響を与えるまでにはいっておらず、純粋な固有思想の表れが随所に見られる。口から口へ伝誦された『耳で聞く文学』（伝誦文学）から漢字の普及に伴ない漸次『眼で見る文学』（記載文学）へと発達した。むろん筆録は漢文のみならず国語もすべて漢字のみで行った。いわゆる万葉仮名である。

古事記

古事記　（和銅五―七一二成立）は

天地のはじめの時高天原に成りませる神の御名は天之御中主神、次に高御産巣日神、次に神産巣日神。此の三柱の神はみな独り神なりまして御身を隠したまひき。

と書き起して、神々の出現、天地の創生、神々の系譜とその系統である皇室及び諸氏族の系譜を中心に、随所に大らかな古代神話を展開し、壮大かつ英雄的な神と人との物語集となっている。天つ神たちの命によって大八島国を生み成し、また山川草木や諸天然現象を掌どる神々を生み成す諸冊二尊の古朴な神婚の物語、火の神を生んだために焼死した妻神を慕って訪れた伊邪那岐命がまのあたり見る黄泉国の暗黒と腐爛の醜状、『汝の国の人草一日に千頭絞り殺さむ』と呪う伊邪那美命に『一日に千五百の産屋立ててむ』と応酬する伊邪那岐命の強烈な現世肯定の言挙げ、須佐之男命の高天原に於ける暴虐の数々とその後の英雄的な国土経営、またその娘須勢理毘売命と大国主命との愛に対して命の与える乱暴な試錬、降っては神武天皇東征の苦しい戦の間に沸りたつ激しい闘志と湧き起る凱歌、嘲笑の合唱、あるいはまた倭建命の勇猛豪快と悲劇的なその最期、后達の悲泣など、慟哭と哄笑、またお伽噺の様な明かるい諧謔と純愛の満ち溢れ、交錯するさまは、これを古代に於ける一大叙事詩だと評する人の有るのももっともだと思われる。しかしながら古事記は、その編修の趣旨においては決して興味本位の説話集や芸術意欲に発する叙事詩ではなく、帝皇日継（天照大神から引きつづいている天皇の系譜）と先代旧事（種々の物語）とを正しく集録して後代に

伝える事によって国政の方向を規正しようとした一種の歴史書であったことは、次に引く古事記序文の一節によって明かに知られる。

是に於いて天皇詔し給はく、朕聞く、諸家の持たる帝紀および本辞、既に正実に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に当りて其の失を改めずんば、未だ幾年を経ずして其の旨滅びなむとす。これ乃ち邦家の経緯、王化の鴻基なり。かれ惟れ帝紀を撰録し旧辞を討覈し、偽を削り実を定めて、後葉につたへむとすとのたまふ。時に舎人有り。姓は稗田名は阿礼。年は是れ廿八。人となり聰明にして目にわたれば口に誦み、耳にふるれば心にしるす。すなはち阿礼に勅語して帝皇の日継および先代の旧辞を誦習せしめ給ひぬ。

稗田阿礼
太安麻呂

斯くして天武天皇が舎人**稗田阿礼**をして誦み習わしめられたものを基として、元明天皇の和銅五年正月廿八日に**太安麻呂**が撰録して奉った。全三巻。うち上巻は神代、中・下巻が神武天皇から推古天皇に至る御代々々の記録で、概して言えば神話伝説の類は上巻に多くて下巻に少く、（仁賢天皇以後の如きはほとんど系譜と簡単な事実の記録だけである）物語も上巻になるほど超現実的お伽噺的な神話（因幡の兎が鰐を欺こうとして赤裸にせられた話とか、三輪の大物主神に恋せられて神と結婚した女の話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

などの如き）が多く、下巻になるほど血なまぐさい政争や哀切な愛の物語が多い。かく昔に繁に今に簡なる点や物語的叙事詩的性格の濃厚な点などは、次に述べる日本書紀と大いに異なる点である。

日本書紀
舎人親王

日本書紀　は古事記に後れること八年（七二〇年）元正天皇の養老四年五月十一日に**舎人親王**が太安麻呂等と共に撰進されたもの。全三十巻で最初二巻が神代巻（一般に神代紀といい、他もこれと同様に天皇の御代によって崇神紀、推古紀などとよばれている）で以下が神武天皇から持統天皇までの御代々々の歴史である。古事記と異なって時代の下るに従って叙述は益々詳しく、政治的事件のみならず文化学芸経済疫病天然現象等諸般の事象を克明に記録し、記録の異なるものも煩を厭わず一々『一書に曰く』として之を録し、可及的に精細かつ正確な史書たらん事を期しており、古事記よりははるかに歴史的自覚への発展のあとが見られる。文体も古事記が漢字を用いながらも極力古語の美しさを留めようとしている（『潮こをろこをろに』とか『天の八重棚雲をおしわけて』の如く）のに反し漢文としての文飾に意を用いている。かくて、「書紀」は「続日本紀」を経て「三代実録」にいたる六国史の最初におかれ、公式かつ対外的な史書として用いられたのである。

記紀にはまた神話伝説の一部として各所に数多くの歌謡が挿入されている。これを記紀歌謡といい、我国の民謡および詩歌の源流として文学史上重要な位置を持つ。しかし各個の歌謡の制作事情や作者については、記紀互に所伝を異にするものもあり、必ずしも歌本来のすがたを示すものではないであろう。須佐之男命が出雲の須賀の地に櫛稲田比売と共に新居を営まれた時そこから雲が立ち昇ったので詠まれたと伝える

八雲たつ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を　（記）

の如き、もし事実とすれば日本最古の短歌である訳であるが、形式の整斉という点から考えても、最古の短歌がこの姿であったとは考え難い。また神武天皇の皇子当芸斯美美命が三人の異母弟を殺そうと謀った時に嫡后伊須気余理比売命がひそかに歌を以て皇子達にそれと知らせたと伝える

佐韋河よ雲立ち渡り畝火山木の葉さやぎぬ風吹かむとす

畝火山昼は雲と居夕されば風吹かむとぞ木の葉さやげる　（記）

にしても、単なる叙景歌が伝誦の間に混入したものではないかと思われる。かくて歌謡本来の姿がどのようなものであったかは、にわかに決定しがたいのであるが、少くともその中には古代人の生活に根ざした民謡的要素が濃厚に存在し、これが民謡とし

長歌・短歌・片歌・施頭歌

て謡われ、やがて中央にとりいれられて行ったと考えるべきであろう。

歌体は長歌・短歌・片歌（五・七・七）・施頭歌（五・七・七・五・七・七）などに当るものも少くないが、定型はまだ整っていない。長歌形式に定着して行くものも、その長さは様々であるが、その中でもほとんど短歌に近いほど短くてかつ形式の整っていないものは一般に古いものであって、それが此の記紀歌謡には甚だ多い。有名な神武天皇東征の際の

忍坂の　大室屋に　人さはに　入り居りとも　人さはに　来入り居りとも　みつみつし　来目の子等が　頭槌　石槌持ち　撃ちてしやまむ　（紀）

とか、倭建命が死に臨んで詠んだという

大和は　国のまほろば　たたなづく　青垣　山ごもれる　大和しうるはし
命の　全けむ人は　畳薦　平郡の山の　熊白檮が葉を　髻華に挿せ　その子　（記）

などもその例である。しかしその内容格調に至っては、『忍坂』のの殺気、『大和は』の一途な思郷、『命の』の激しい生命讃仰、『佐韋河よの』繊細清新な自然感覚、いずれも素朴で共同的な性格が強く、意欲的なたくましさと全身的な感動と、生活的な野趣

と明るさとがみちみちている。

この期の神話・伝説を伝えるものに記紀の外に風土記がある。

風土記　は七一三年（和銅六）元明天皇の勅により諸国から撰録献上した地誌で、地名産物等を記してあるが、その中に記紀に定着された中央貴族の伝承とは系統を異にする地方民間の神話や伝説が数多く収められている所に独自の価値がある。このうち現存するものは出雲・常陸・播磨・肥前・豊後の五風土記で他は散佚し、断片的に他の文献に引用せられたものが残るに過ぎない。（これを逸文風土記という）。現存するものでも完全なのは出雲風土記だけである。左に出雲風土記の国引きの一節を示しておこう。

国引きませる八束水臣津野命の詔り給はく、八雲立つ出雲の国は狭布の稚国なるかも、初国小さく造らせり。かれ作り縫はむとすと詔り給ひて、栲衾新羅の三埼を国の余有りやと見れば、国の余有りと詔り給ひて、をとめの胸鉏取らして大魚の腮衝きわけて、幡薄ほふりわけて、三搓の綱打ち掛けて、霜つづらへなへなに、河船のもそろもそろに、国来国来と引き来縫へる国は、吉津の打絶よりして八百土杵築の

御崎なり。云々。

祝詞と宣命も実用性をもったもので、純粋な意味での文芸ではないが、特異な文体をもち文学的修辞法に富んでいる。共に国語を漢字でもって、現在の仮名交り文の如くに書き下したものであり、整斉した形式、列挙・反復・対句等の駆使によって雄大な声調と荘重な響を生み出している。宣命は続日本紀の中に収められ、天皇の詔を臣下に述べ聞かせるもの、祝詞は延喜式の中に収められ、宮廷に於て神を祭る際に神に祈り、天皇に寿詞を奏上し、あるいは神の言葉を神主や人民に宣布するものである。

大臣乃御世重氐明浄心以氐仕奉事麻依氐奈母、天日継波平安久云々

（天平勝宝元年宣命）

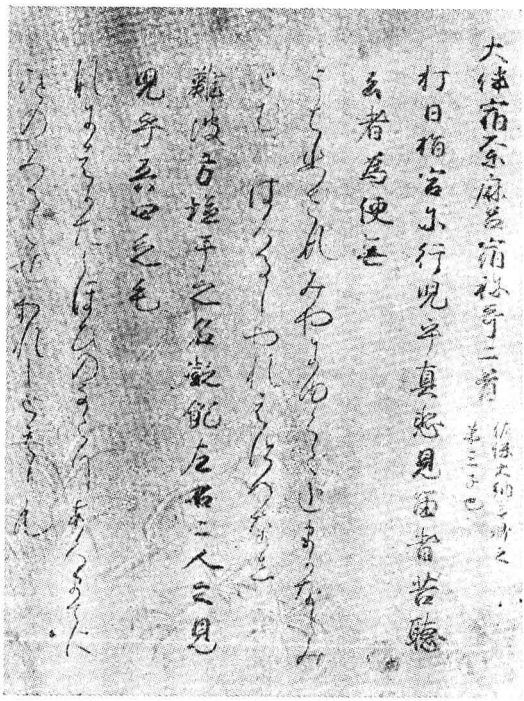
集侍親王諸王諸臣百官人等諸聞食止宣。天皇朝廷尓仕奉留比礼挂伴男、手襁挂伴男、靫負伴男、剣佩伴男、伴男乃八十伴男乎始氐、官官尓仕奉留人等乃、過犯家牟雑雑罪乎、今年六月晦之大祓尓、祓給比清給事乎、諸聞食止宣。

（六月晦大祓）

記紀歌謡は神話伝説の一齣として人々に語り伝えられたもので、作者や制作事情が記されてはいるが直ちには信じ難く、むしろ当時行われた民謡の類が自然に伝説の中

に吸収されたと見るべきであろう。従ってそれは何時誰が詠んだということなく、何時ともなし誰ともなしに謡いはじめたものが村から村へまた次々の世代へと謡い伝えられたもので、集団の文学であり自然に生れて漂う様に伝わって来た文学であると言える。

これに対して個人の文学であり意識的な創作意欲の所産である芸術詩はこの時代の末期、大化改新の頃から



万葉集の一部

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook